

20世紀の始まり（1901～1915）、その4

《田園都市の登場と、耕地整理の始まり》

「田園都市」は、イギリスのハワードが1898年に出版した「ガーデンシティ」が基になった言葉です。直訳では「庭園都市」ですが、1907年（明治40）、内務省地方局（注1）の有志が翻訳した際、稲作の日本に合うよう、改訳したことによります。

関東では、1912年（明治45）から1913年（大正2）にかけて、東京信託株式会社（現日本不動産）が、「田園都市」の言葉を使い、新町分譲地を造成、販売します。（注2）

また、多摩川中下流域では、耕地整理組合（注3）が設立されていきます。1912年（明治45）玉川全円耕地整理組合（現世田谷区 注4）、1914年（大正4）中原村記念耕地整理組合（現川崎市）や新井宿耕地整理組合（現大田区）など、1917年（大正6）川崎町第1期耕地整理組合と続いていきます。この耕地整理が、田園都市（一部は工業都市）の基盤を整備していくことになります。

なお、1918年（大正7）には、「田園都市」を冠した株式会社（注5）が設立され、1922年（大正11）洗足田園都市を開発、分譲します。この田園調布株式会社が、開発地へ鉄道を引くために設立した鉄道会社が、現在の東京急行電鉄株式会社（東急電鉄）のルーツとなる会社であり、敷設された鉄道が現在の東急目黒線－多摩川線です。

このように、イギリスのガーデンシティの出版に約20年遅れながらも、多摩川中下流域のあちこちで土地基盤整備の機運が一気に高まります。また同時並行的に、臨海部の埋め立て、科学技術の革新による新産業の創出など、近代への変革を促す流れが顕在化してきます。

そして、1918年（大正7）に多摩川直轄改修が開始されると、住宅地などの土地基盤造成、工場進出に拍車がかかり、急激に近代都市の原形が形成されていきました。（写真参照）地域改造と経済活動の熱気溢れる世界のホットスポットになったわけです。

注1：内務省地方局は、戦後自治省となり、省庁再編後は総務省の一部となっています。

注2：関西では、関東より数年早い1910年（明治43）、箕面有馬電気軌道（現阪急電鉄）が、池田駅近郊に室町を開発、分譲しています。ただし、「田園都市」という言葉は使用していません。

新町分譲地の最寄り駅は、東急田園都市線の桜新町駅です。桜新町駅には、サザエさんの像が建っています。

注3：衡地整理組合は、1900年（明治33）に施行された耕地整理法に基づく組織で、農地の利用増進が目的とする耕地整理事業を行なう母体でした。多摩川流域では、住宅用地開発、工場用地造成として活用されました。こうした実態を踏まえ、1919年（大正8）に制定された都市計画法では、耕地整理法を準用して、土地区画整理事業を行なうことになりました。土地区画整理法として独立の法律になるのは、1954年（昭和29）のこと。耕地整理法は、1949年（昭和24）制定された土地改良法制定に吸収されました。

注4：玉川全円耕地整理は、当時の玉川村全域約1100haを対象地域とした一大区画整理事業でした。組合設立後の1928年（昭和3）に事業着手し、約30年かけて遂行されました。

注5：田園都市株式会社は、「田園都市」を実現するべく、渋沢栄一が相談役として主体的に関与します。事業用地は、洗足（現在の目黒区洗足二丁目、品川区小山七丁目）、大岡山、多摩川台（現在の田園調布、玉川田園調布）の3地区に跨り、約160haを買収しました。このうち、大岡山の買収地には、現在、東京工業大学が建設されています。

写真は、①桜新町駅のサザエさん（細見撮影）、②20世紀初頭の区画整理事業の位置を地図で比較（今昔マップを細見が加工、加筆・・・耕地整理の場所を概略で示す）

①



②

